卒論報告

カール・チェルニーのピアノ・ソナタ作曲実践
–『実践的作曲教程』作品600と《ピアノ・ソナタ第9番》作品145に基づいて–

秋山　明（演奏・創作学科 鍵盤楽器専修（ピアノ）　2022年度卒業　音楽学コース修了）

チェルニー（Carl　Czerny,　1791-1857）の『実践的作曲教程』作品600と《ピアノ・ソナタ第9番》作品145の分析により、ピアノ・ソナタの作曲において調配置により生まれる緊張度によってドラマを構成していることがわかった。以下、その要旨を報告する。

チェルニー経歴

ウィーンで生まれ幼少期から音楽教育を受ける。10歳でベートーヴェン（Ludwig van Beethoven, 1770-1827）の弟子となるほどのピアノの腕前だった。しかし、演奏家にはならず15歳でピアノ教師になる。その評判はとてもよく、リスト（Franz Liszt, 1811-1886）などを育てた。また、作曲家として生涯に861作品を出版している。ピアノ練習曲やパラフレーズ、室内楽、交響曲、宗教曲などがあり、その他作曲の理論書なども執筆している。

『実践的作曲教程』作品600[1]

チェルニーが1839年頃に執筆した作曲の理論書。チェルニーは、ソナタ形式は確立された形式を持つとして、第一部分[2]［提示部］でキャラクターの説明、第二部分の［展開部］にあたる箇所で複雑化、［再現部］にあたる箇所で満足が得られる結末、という構成であると説明している。チェルニーは具体的な構成方法を調配置に着目して説明しており、主題労作についてはほとんど触れていない。ローゼン（Charles Rosen, 1927-2012）[3]は、ソナタ形式の分析の主眼を調配置の生み出すドラマ性に置いているが、チェルニーの『実践的作曲教程』（以下Op.600）からも、チェルニーが調配置によるドラマ性に主眼を置いていたことが読み取れる。

表１　《ピアノ・ソナタ第9番》構成

	テンポ・楽想	調性	拍子	演奏時間
第１楽章	Allegro con brio	ロ短調	4/4	8分45秒
第２楽章	Scherzo Allegro molto -Trio Un poco sostenuto	ロ短調	3/4	3分41秒
第３楽章	Adagio Molto espressivo	ニ長調	4/4	8分6秒
第４楽章	Allegro vivace	ロ短調	2/4	2分15秒
第５楽章	Rondo Allegro moderato	ロ短調	4/4	7分11秒
第６楽章	Fuga Allegro	ロ短調	4/4	3分28秒

《ピアノ・ソナタ第9番》作品145

1828年に出版された。モシェレス（Ignaz Moscheles, 1794-1870）に献呈されている。

《ピアノ・ソナタ第９番》作品145の独自性

以下、Op.600に基づいて、《ピアノ・ソナタ第９番》（以下Op.145）の楽章構成、調配置を分析した。

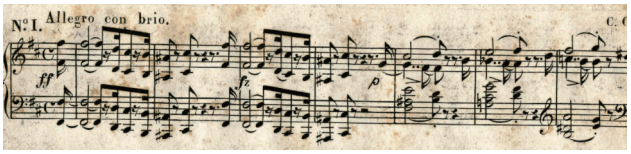
1. 楽章構成について

チェルニーはOp.600でソナタの構成を全４楽章と説明している。チェルニーのピアノ・ソナタは11作品あるが、そのうち6作品が５楽章以上で構成されている。Larson（2015,　p.102）はそれらも４つに分類できるとしている。全6楽章構成であるOp.145もそれが可能か考察した。

Op.600では緩徐楽章を第２楽章に設置することを推奨している。Op.145において緩徐楽章は第３楽章に置かれている。これを２番目の楽章とするならば、第1・2楽章がセットとなる。この2つはともにロ短調で調性は一致している。一方、第3楽章はニ長調のため調性が異なる。緩徐楽章である第3楽章に対して、第4楽章のテンポはAllegro vivaceであり、対照的だ。また調性は、第3楽章と第4楽章は平行調の関係にあるため、第３楽章は単独で緩徐楽章を構成している。第4楽章はスケルツォ楽章で、チェルニーは

譜例1　《ピアノ・ソナタ第9番》

第1楽章第一主題



出典：“Piano Sonata No.9, Op.145（Czerny, Carl）”
UR Research at The University of Rochester.
http://hdl.handle.net/1802/32298

Op.600でスケルツォは第3楽章に設置すると説明している。第5楽章はロンド・ソナタ形式で、これはOp.600で終楽章に推奨されている。続く第6楽章のフーガは、ピアノ・ソナタの終楽章にフーガを配置する例が過去の作曲家にみられると説明されている。つまり、第5楽章と第6楽章はセットで終楽章と考えられる。

したがって、私は第1・2楽章、第3楽章、第4楽章、第5・6楽章の4つに分けることができると考えた。

2. ソナタ形式の調配置

第1楽章の調配置の特徴として以下の点があげられる。

・Op.600でソナタ形式の転調方法として説明されている、「短調の転調方法その2」に近い。ただし、完全に一致しているわけではない。

・再現部を同主長調(ロ長調)で開始している。これは、彼の他のピアノ・ソナタではみられず、この作品の独自性がみられる内容である。

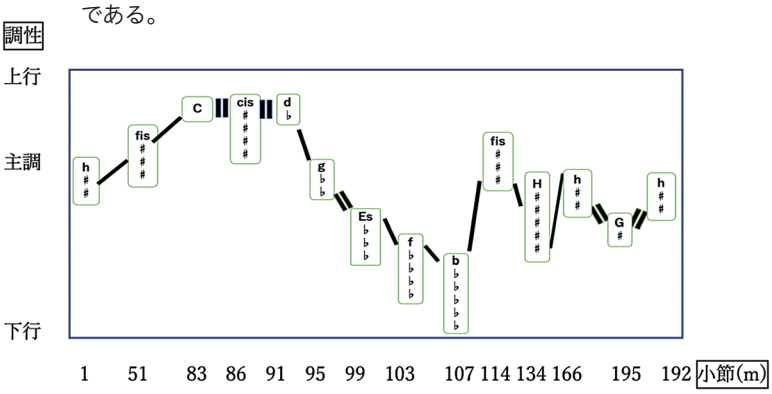


図1　第1楽章　調配置表

3. 調配置と緊張度の関連とドラマ性

全体的な傾向として、調性が主調から離れていくと緊張感は高まる。しかし、緊張のピークは、最も主調から離れた変ロ短調が現れる107小節ではなく、属調で書かれている126小節である。これは、126小節で属音が保続され、遠隔調から主調へ戻るという期待感が最も高まっている場面であるためと考えられる。緊張感は再現部で長調になり解放される。

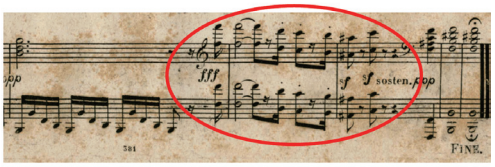
チェルニーがOp.600で説明している「主要なアイデアと異なる性格の説明」「出来事の長引く複雑さ」「驚くべき破局と満足のいく結論」は、それぞれ「提示部での主題提示」「展開部での転調」「展開部の終盤から曲の終わりにかけて」に当てはまると考えられる。特に展開部の終盤(mm114-133)は「バスにあった属音が、2小節で上昇し、ソプラノ(c2とc3のオクターブ)で保続される」と実際に物語を付けることができる。また、再現部の冒頭で主調に戻らず、第一主題は伴奏として登場するのみである。第一主題が主調でしっかりと再現されるのは、最終楽章のコーダである(譜例2)。つまり、第1楽章から第6楽章まで通して一つのドラマとなる構造がとられている。

4. 献呈先モシェレスとの関連

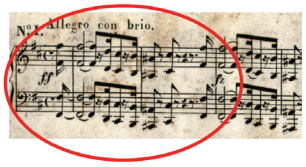
モシェレスのピアノ作品には、単一楽章のソナタやアタッカで演奏される協奏曲がある。チェルニーはモシェレスのこうした作品を知っており、循環形式を用いて全体の統一を持たせた作品にした可能性が考えられる。

譜例2　《ピアノ・ソナタ第9番》

第6楽章　末尾



第1楽章　冒頭



出典:"Piano Sonata No.9, Op.145 (Czerny, Carl)."
UR Research at The University of Rochester.
http://hdl.handle.net/1802/32298

Op.600とOp.145に基づいたチェルニーの作曲実践

チェルニーがOp.145で行った作曲実践は以下の通りであると考えられる。

・楽章数を増やすことで規模を大きくする

・再現部を同主長調で始める(この作品の独自性)

・チェルニーはソナタ、ソナタ形式のドラマを調配置によって作り出している。

チェルニーはピアノ・ソナタについて、Op.600で調性の配置によってドラマを作り出すことを説明しており、Op.145は実際にそのような構成をとっている。このことから、チェルニーはピアノ・ソナタに対して、調性の配置によってドラマを作り出す、という手法を取っていたと考えられる。そして、こうした視点をもって、彼の作品を分析することで、私たちは彼が作品に対して意図した構造や物語に近づくことができるのである。

彼の作品の魅力をさらに発見できることを期待し、今後もこうしたアプローチでチェルニーの作品を分析していきたい。

1:チェルニーは理論書にも作品番号をつけている。
2:チェルニーはソナタ形式を第一部分、第二部分の2部分で構成されていると説明している。
3:アメリカのピアニスト、音楽学者。

参考文献

・ヴェーマイヤー、グレーテ.　1986.　『カルル・チェルニー　ピアノの囚われた音楽家』 岡美智子訳.　東京:音楽之友社. 請求番号●C23-679
・ローゼン、チャールズ.　1997.　『ソナタ諸形式』 福原淳訳.　東京:アカデミア・ミュージック. 請求番号●C61-632
・Czerny, Carl. 2016. Sonate Nr.9 in h-moll, op.145, für Klavier. Herausgegeben von Iwo Zahuski. Wien: Doblinger. 請求番号●G34-885
・Larson, Levi Keith. 2015. "An Underestimated Master: A Critical Analysis of Carl Czerny's Eleven Piano Sonatas and his Contribution to the Genre." PhD diss., University of Nebraska. https://digitalcommons.unl.edu/musicstudent/92/

参考音源

・ジョーンズ,　マーティン.　2009.　『ツェルニー:ピアノ・ソナタ集1-第5番、第6番、第8番、第9番』
NAXOS MUSIC LIBRARY:Nimbus NI5832-33,　CD.

あきやま　めい　●　音楽について国音という充実した環境でのびのび学ぶことができました。引き続きチェルニーの魅力に迫っていきたいと思います。